特55
287

016154－000－0

特55－287

〔西国三十三所霊場〕

内田　正鳳／著

M12．4

ABC－2029

特55
287

柳人王山千五代花山帝ハ御出ニ御伝授ニ
御坂恩ヒ山ヲ御ひ山科ハ花山院ニ御繋と
御詠ませ御ひ熊野權現ニ無事ニ御遊恵蒙ニ
より河内国石川寺なる佛眼上人と連られ西國
三十三所ハ天場那智山より終谷沢迄一ニ御祿奇
ハ山製ニ御せられしより今ハ園ハ俗共ニ順礼ハ
常を志願ふるく今ハ世迄も廣大ハ人なりと
うゝ詠よりともふ入ゆるゆるまじ
これぞ佛しハみちふなるべし

第一番　紀州那智山

和泉式部

式部ハ[illegible]志深く此乃に達せん
[illegible]
百人一首[illegible]
山系[illegible]ふ中月の[illegible]
「[illegible]
月の[illegible]
と[illegible]
「[illegible]
月の[illegible]
[illegible]
[illegible]
文学[illegible]
「[illegible]
[illegible]
[illegible]

第二番　紀三井寺

威光上人

開基にして[illegible]
[illegible]
一人[illegible]
[illegible]
[illegible]三年と[illegible]
法[illegible]加[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
七月七日[illegible]
「[illegible]
[illegible]

第三番　粉河寺

渋川佐太夫

河内の長者獨の子大病にかゝりし手を
尽せども験なく夫婦心なく祈ら
童子来り加持して千手陀羅尼を
教けるに苦痛を免れしかバ夫婦ハ大に悦
謝礼せしにても一諾も受ず娘の紅袴と提を
りて粉川の者なりと去りぬ後しへ尋
ねきとも知らず庵に休らひしに仏前へ
光かゞやき千手観音の御手に子の提
紙かゝり居り扨ハ童子ハ此仏に在せし
と御ありさまハ世上に隠なく瀧田村の
冨せる里の建立施主となりしとなん

ちゝはゝのめぐみもふかき粉川ち
ほとけのちかひたのもしの身

第四番　和泉　槇尾寺

光明皇后

智海上人とて行法堅固の僧ありて或時
牝鹿来りて上人の前に来て子を産む女子
と養育して捨がたく村の者に養育さ
せしに七才の時田を植つけ居しに
奈良の不比等公寺に参詣のおり
此女ところなき才の内より光明を放
扨ハ観世音の化身なるに疑なしと
ともなひて帰り丈夫に成り天帝に奉る
しかし聖武帝の皇后となり光明皇
后と称し仏法を深く信じ給ひし
も観世音の変化とぞ

みやまぢやひばらまつばら
わけゆけバまきのおてらに
こまぞいさめる

第五番 河内 藤井寺

藤井安基

大和の住人にて放埒邪見の者なる時白石の山にて麻をとり堂に入て經仏佛具を朝夜消耗とおもしろ麻を食せば俄に死して地獄に陥入し処閻ノ[illegible]のおおひなる大鬼に苦悪受るべしとある処童に現ぜしに彼は我長谷寺再興の桟木をとりし古根にはべ速に沙婆に出しあへしにければ藤井せしより改心し仏堂の牙にとかり此等源を造り西国に安置し故藤井寺と今世に至るなり

まいるよりたのをかくる
ふしへてらたなのうてなに
むらされ[illegible]

第六番 和壷阪寺

聲者澤一

垣武天皇御眼病の時に就自在芹の功徳を以御平愈在らせられ建立の就方なれば沢一といふ三百人千日の間祈願と迎ぶ事更に御利益ありさまこそ本尊を恒とかくるさに浮ろの方より微妙の声にて沢一と呼ばれ[illegible]まいらせ振る面れたるにふしたれや眼は明らかにて世堂の面れ官女の姿と現じ[illegible]三年五年しき秋の夏に[illegible]宿業にはなるとの告より妻子ところ[illegible]三十三所を巡拝しける

いまとなりてあとなくて[illegible]
はたのいさこも[illegible]
おろらん

第七番 大和岡寺

長門の少女

青野の里某の女西国順礼と志し
むそのに家を出三十余人船にのり合
海上にて難風に船を砕かれ残らずおや
ま死せしがこの少女のミ浦近に船に
上り家に送らましかハ両親ろうこび
次方をゆくに船をくぐられ気悟を見
るめ岡寺の御稱奇を心に深ぶまゝ念
ぜしに帆篷にとり付きしといふまゝ
送りたる漢文もふしぎなる告げて
浦に出て助け続ひ来たりとなり
観世ゆるの大然ハあがらしとなり

「けさうをもゝ はゆおうでらの
みてのいけさながらるりの
ゆうかなりけ利

第八番 長谷寺

道徳上人

昔天和川洪水の時一ツの毒木ながれ来
たり辺寄る者命を失ふ上人これをなげ
れ隨ひのあふまゝ右の枝を守るあり
るに大王の曰く彼の毒木をとつて大然の
像を刻ミ法人に拝させなば毒木変じ
業となるまゝ日本の国ハ観音の霊場
三十三所を巡礼されハ此地獄来る
るほどの仮枝上大きなるハ来世流生殺ひと起き
ぬ様を証とそ大王を多くに無利益なるを上人
ハ法人ありとせ家を後中山寺霊活のやうを中山
寺の什物となり 係ハ高寺の霊仏となる

「つくたびもまつることなるまゝろせでら
山をちかひもふかれ
たにがこ

第九番　南圓堂

春日明神

御父右大臣藤原の子孫の繁昌と弘法大師ふかき契約ありれバ不空羂索の係と遷ぜしかバ遥ハ印度雀飛てきたり春日の神人矢を受りて来ると遊バすハ但雀飛てきたり春日の神人矢を受りて来ると遊バすハ但雀飛てきたり春日の神人矢を受りて来

一神殿造の事の外しふたう建てつゐぞ築てハ給ふのふじゐ

と越されけれバ寺と成ぬるを一と仕られ消失せしかバ仮に建し社造り永世せん護神と

なりふ

えらの山ふもとの

うもうを

第拾番　小城三室戸寺

綿ノ田村農夫

此ハ名ある俳人を尋ねふけまの趣きを

と云ふ。此ハ一ツ式時村の去農夫にまつく

元来りしそハんとも云ふ。此ハ一ツ式時村の去農夫にまつく

て実ハ放生して又祝田ぶくーの

ハ此と春とう年明けんと申れもまく

ハ弥々弥文なと知ハ我ハとうん年

せん為ぬ放生して我者の事成ハ

て今ハ此ハ姫と一ツ寺ふ陰も仏物実ふ

ハうんとも共一ツ寺ふ門出ハ

て逃船うめの此時雑戦ーく

仏物と袂をかり姫ふ恩を報ぜうと思ふ此

へと寺とふ

ようともぞら月とみおうとうけゆけむ

宇治の川波ふなりけるもらるみ

第十一番　山城　醍醐寺

聖宝僧正

僧正ハ智徳勝し名僧にて昔役行者
熊野より大峯に入吉野へ出る峯入を始るに
其後大阪にて峰入可出するなる此僧共を
双の勇力なる故大鉞を以て大阪を遮滞し
二度の峰入を開起なるに大阪の毒に乗り悪
魔と生じ其痛絶ざるに準眠陀羅尼
を誦し一心に念ずる其の事に観音聖
宇治の宝石山に呉水ありて早く以て浴せ
よとのゆ岩に仁王般の地に出りゆゆ
立ちに平地も此時天倫理を泄現世者
の徳を刻て一寺を建立せしと呉水を手に湧
「きゆく名のしらさでもなん　なるとなり
ぐるくなれは志ゆんとしいどもも
たりそし見こう那」

第十二番　近江　岩間寺

芭蕉翁

挑青ハ天下に名を得し排家の祖翁ハ
あまりける寺の観音を深く信じ何年秋
乃に遊ばんと祈誓し此寺に遊ぶ思分山
に宋居し三年の万住即ち此地を行住庵
と閉て一夏九十日の日に法花経二十八年
と石へ向に一宮ゆく出此里の小僧に石をひら
ひ世持来る者ハ菓子銭にへてもみやう
に教授いてしことにありしも大魚の美だ
人数あり名を一天にかくやうせしも僧に仏の
御利益あり此事にて行住庵の記を書
たりき其に「まつ松ぬ椎の本をなり　夏木立
「こゆるこそ　いろくなるらん
岩間寺　さしらの所なみハ
松うぜのおもて

第十三番 近江 石山寺

鹿ノ子の御影

京本願寺七世の上人

[illegible]

第十四番 近江 三井寺

大津の町下女杉

[illegible]

第十五番　山城　今熊野

捕　正成

正成寺の紀氏を深く信じ毎日参詣おこたらず彼観音の霊夢の告有故百日精進の暮方身を清めて一人のもと欲除の弓矢を断取敵を待一夫不当萬人と称て敵

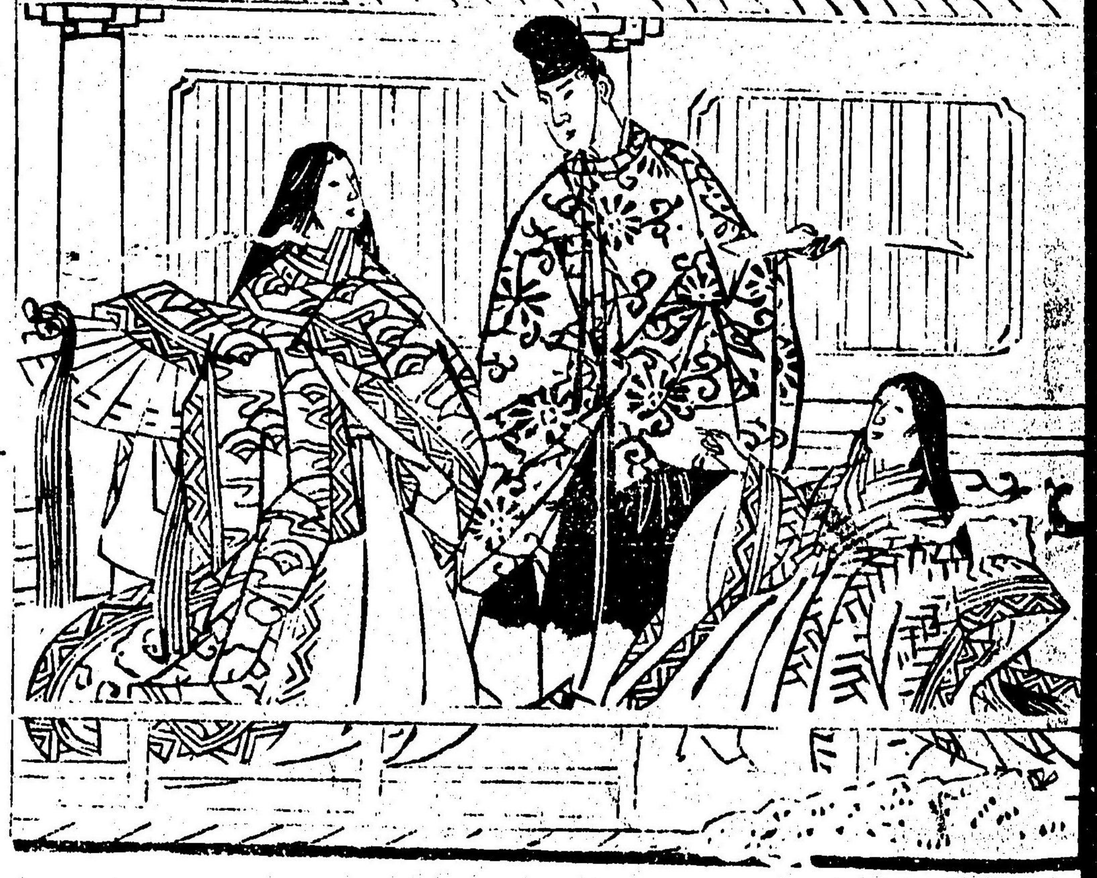
三十人一度にかゝるを右のそでふりはらひ御前山中せしに敵四方より取巻ども信徒我二心なきかと思召さるゝ御心中にて一生懸命にせめ戦ふ

もろこしの養由のごとくなりけり

第十六番　京清水寺

熊野　御前

熊野は本常に清水寺の観音を信心なり七世迄名子なき夫人平家盛を祈誓し給ふ夢の告にて熊野を招き給ふ熊野は名代として参詣を施し給ふ熊野は名代の母の大病なれども宗盛の仰にて清水地主の若男に逢ひて清水地主の若男に逢ひて清水地主の若男に逢ひて清水地主の若男に逢ひて



第十七番　京　六波羅密寺

空也上人

天暦五年の春洛中ことの外大
疫病流行して諸人の葬死街に
みち万人の悲しいとん方なく空也
上人深く歎きて自ら十一面の像を
刻みて丹城治情にいのり其像を
車に乗せ市中を曳まわり信を
進めしに一度感ぜしに町ハとみ
食けり諸人大悲の妙智力を蒙
る蓋に蒙寺を開基なしぬ仏
様を奉るとせり又四条湯とい
ひしく者ハ忽ち疫病治したる
即ち東山に安置しする六波
羅密寺是なり

なほまた疫病大に流行せしとき
此親世者ハ位ドたる曲業を病人に
被せ分たるとてもこゝろに治ざるとの
とて是ハ此事時の帝村上天皇
喫こし百ぎて肆に御信仰あり
よりて吉例とて毎歳元朝に伴供
の四条湯と復しぬにより今
に至る近此例しとおいて王殺と号
し祝し用ゆるハその年の疫を
れと免るゝためなりといへり

「拾とくとを
いはしのつなハ
よもあらじ
祝くまちだらく
まいるミなをぜ

第十八番　京　六角堂

池之坊

第十九番　京　華　堂

東山大工衆

第二十番　山城善峰寺

開山源算上人

上人ハ拾内にある時母を苦しめたる事ニ依て
ふ祥の子ありとて山に於せしむ阿知坂
の神を護しかゝ鼓鳥獣も害せも村人
拾ひ拾げ十五才の時叡山に登りそ
の後源算上人とてたゝいる起行と
あり母の死とかゝ當山に來り練行
ありしが口に説き信ぜ口によりて
山の神を雇夫と限ゞし数の精麻来
りて岩石を平地とせしの天朝に出し
仏開の庭立あり上人ハ百十七才にて
定ゆ入諸ひ寂も宮たい変せ代越後
の仏智法師にひとし

「師とも其死山ぢにむかふ所めの花ら
よしこゝ遠よりもたるあく夕だと

第廿一番　丹波穴穂寺

辰女

亀山釜屋某の下女たるハ若く説者とよ
く信ぬるとし　けるが雲洞世上一般に於て
病流行し此金屋も家内中伝染して
まつらひしが其一主人無るに辰女の郎屋
に光明かゝ世人辰にまたるを取るに夜
あく枕辺に坐る事柳の枝にて其事
の如きを口入分ふ所なるのあり仏道
の出方ありと聞ゆバ穴穂寺の者あり
とて遠に其家の如く呉道が病苦と
立ちみに忘まてしハ誠にあらしむる
大恩の仏身なるを

「かゝる世にむまれ行ふ事のいるを
おとゝでたのめ也こと　ひとこゝ

第二十二番　攝津　摠持寺

山蔭中納言

[illegible]

第廿三番　攝津　勝尾寺

百濟王后

此后ハ[illegible]美人にて國王殊に愛し[illegible]

[illegible]

第廿四番 摂津中山寺

多田蔵人の室

蔵人幸氏公ハ元ゝ歌世青と信仰深かりしが其ゝ奥方の不信なると歎かひける年の春花見ふ事よせ中山へ詣でゆかしめ…ゝ……へいつや…から…ゝと本堂ふ至りおもひ…ゝ…ら人とせ…ふ…日の…ふ…ゝ…で…正体と…へ…なのと…と…ゝ……ゝ……ゝ心とあり…ゝ…ゝ…と…夫婦一世…の…と…

「御詠歌」…ゝ…とも…て

中山のてらへまいりて
のちの世の…

第廿五番 播州 新清水

陪夫太郎

陪夫太郎ハ鎌倉ニ入鹿を誅伐の時の供…ゝ…ゝ…大臣と…を…所…この…ゝ…と…出…深山ふて…ゝ…ゝ…ゝ大と…て山ふ入り…の…ゝ…と…ゝ…の…ゝ…と…ゝ…ゝ…ゝ…の…を…切…ゝ…の…を…陪夫…大の…一…信仰の大士の…

「御詠歌」…ゝ…の…ゝ…

第廿六番　播州　法華山

法道仙人

国基上人ハ天竺より後漢に陸花山に空
海と云神を祭して結養と交る事之
式時　菊井　栗植中　貞来紙幡で
様ニ儀を越て上人路神を来り集
とも菊井神を呈来をる神ハ常中
と走る不隨ひ千石の米を取て
飛行ハ菊井神を見ると止り山に
平作して隠ると亀ひ常中を船に乗
ハ来り　其時儀深中にて共待たる也
と米隋村とや　なるとは此の感ぬ
遣し帝より仙盛を建立ありし
春ハ年々ハ立花
いきハきく川もたへ甚ぬ
のまのもるゆ　ぬ

第廿七番　播州　書寫山

性空聖人

寶寺開基天台智徳の名僧性空ハ
法花三昧を修し日ハ時空中に有来
空ハ天香くんど天人下降り座前の様
本紙猶存在上人ハ[illegible]と云故を[illegible]
ぬへハ一人中ゆうは樹ゆ　其木なり是
をとろて観世音の像を仏り来世の花
生を御座せしめ人と知らせ方中に
久しより聖人此本にて自ら手の
像を別に我花を一字と通ず
ゆふ是書写山の開基なり
「なるくしと
のわまばきよしゆの
山おろし
まつの[illegible]
みのりなるらん

第廿八番　丹後成相寺

齋遠禅師

齋遠ハ教待と信仰深うして一年大ゐ誦ること十万巻なり人ゝ施物を投ぶ納て供ふ飢ゑを凌ぎ給ふ事ハ猶ほ鳥の空をとぶ如く身ハ軽く心ハ清し三界ハ皆我家と悟ひ六道ハ共に我ゆくへと観ずる故に未来を願ふのみにて仏ハ心のみ安く成おほせ給ふ

ゆみのおとおのこゝろもありあけのそら

第廿九番　若狭松尾寺

結城宗太夫

常々大悪と信じて若狭ふく或夜関所の番頭ハ夢ノ告ありと大ふ渡所宗左衛門屋敷へ一夜ハ留りどし共悪なき故ゆるし給ふ程ハ殺るへしと白ル故宗左衛門屋敷にて空中より声山ふ山ふ君のため殺るゝ心地してそれをおそれ給ふ事ハ

とくんとく中ふ下ル新教主弥勒ふ末世ハ悪人ふ威徳一代ハ悪を以て善を治ル事ハ

此のうらこそいく上

あら思ひらんあらうとも

みよせハこそふ松のみのてら

第三十番　近江　竹生嶋

仲算上人の児

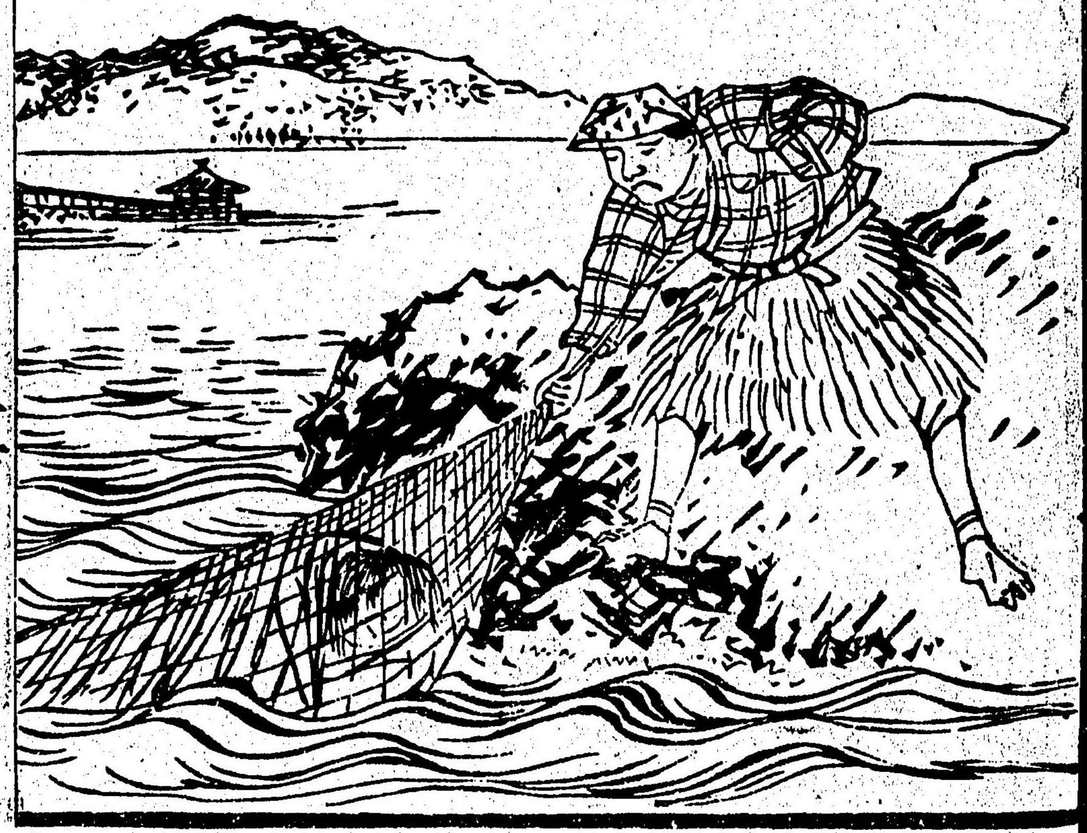
八歳の夏の比、父母の仰にて、仲算上人の
伏拝の山に入給ふ事と聞しに、
七日に及ぶ迄帰り給はず、
ふしぎの事に思ひ、
尋ね登り給ふに、
啓白の声山々に響き、
異香薫じ、
瑞雲たなびき、
権現来現し給ふ、
尊き事限りなし、
児は岩屋の内に入給ひ、
三日三夜祈念し給ふ、
其間の事、
十余年の後迄、
覚えて物語り給ひしとぞ、

月とりよ　おとりよ
うらの木ぬれ
折ふたうとや
こしのくろ
せよ

第廿一番　近江　長命寺

佐原藤十郎

昔、越前より、
来て、深く、
発心して、
出家となり、
諸国修行の
時、
此寺に、
参籠して、
三七日の
間、
断食して、
祈念しけるに、
満願の夜、
夢中に、
一人の
老翁、
来現して、
告げて
曰く、
汝が
発心、
殊勝なり、
我は
是、
当山の
守護神
なり、
汝が
願ひ、
成就
せん、
急ぎ
帰国
して、
八十
まで
いのちを
たもつべし、
と、
告げ
給ふ、
と、
見て、
夢
さめ
ぬ、



第廿二番　近江　観音寺

人魚

聖徳太子は石寺村と申り申す時芦原の中より既に人にして全身魚のうちなるを返出て私し見え此浦に往て殺生をこのみし罪穢りて猿の湯なりしを浴せしとまゝ来りし君大悲をたまさせ申ひ一字の生舎に大悲の像を安置しなひ我をたすけ給へと願けれは太子自ら手を執て其の像を彫て大悲と申建立ありて入佛供養の時人共は水中よりなりて出まのあたり天上界に生成せしとぞ

「おなとふ事こちびたたまへ
うるんおんじ」

とふれ国よりたこぶ
おゆうぐ

第廿三番　美濃　谷汲寺

大倉太郎信満

信満は美濃の金商人之者大悲を深く信じ武時文殊菩薩童子化して灵木捜の本ゝ十一面観音の像を造りて信満に与へ京都仁和寺に於て供養し既に美の鶴井に来りが泥しきて般若の如く為像泥しの中より出ひ此處に寺の地と五里半切止りに帰ち今の谷汲なり太郎は大悲の心に随ひ此處に伽藍を建立せる像の連華の下に涌出る池にて常燈明なり依て谷汲寺と号せしとなん

「いつまでいかゆとしのこしおいぼるを
ぬぎておきむる美濃の
毎にぐみ

百物天真創業工松本氏は生國
肥後熊本にて先年本国を越後府
に旅行し西国に於て新に博物
巡ねなし其昔より梨作を愛し大きなる
利益を尋閲に候細十二流奇妙業
児女童蒙に結縁にとゆゑ一志
なれば異にして小冊に綴り着面包

明治十二年四月十一日御届
同　年仝月　出版

定價金三錢五厘

編輯　東京府下浅草區浅草北東仲町第八番地　松本喜三郎
出版人　大阪府下西區新町通壹丁目第十番地　田中文治郎
記者　内田正鳳
画工　久保田桃水